

法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と 『秘密集会タントラ』聖者流

苦 米 地 等 流

はじめに

インド後期密教の中国への伝播においては、北宋代を中心に『秘密集会タントラ』や『ヘーヴァジュラタントラ』など数点の主要聖典が漢訳された。その一方、これらの聖典の解釈・実践に関する流派文献はほとんど伝わっていない。これまでの研究でも、わずかに慈賢訳『妙吉祥平等秘密觀門大教王經』（大正 No. 1192）などに『秘密集会タントラ』ジュニャーナパーダ流の体系との関連を窺わせる要素が存在することが報告されるに留まっている（田中 1991: 5-9）。本稿では、インド後期密教の特定流派の説を伝える数少ない漢訳仏典のひとつである法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』の内容を概観し、そこに断片的に見られる『秘密集会タントラ』聖者流の所説について検討する。

『最上大乘金剛大教寶王經』の概略

『最上大乘金剛大教寶王經』（大正 No. 1128, Vol. 20, 542c2-548b24, 以下『寶王經』と略）は、10 世紀後半にインド僧法天（生年不詳・卒年 1001 年）によって漢訳された密教經典であり、上下二卷、大正新修大藏經で 7 ページほどの比較的小部の文献である。対応するサンスクリット原典・チベット訳の存在は知られておらず、同經からのものと見られる短い引用が聖者流所属の『秘密集会タントラ』註『灯作明』に“Mahāmahāyānaratnarājasūtra”の名で出る（後述）以外、サンスクリット原文は確認されていない。また、管見の及ぶ限りこれまで『寶王經』の内容そのものを扱った研究は無く、インド密教文献においてしばしば言及される伝説的な王インドラブーティ（Indrabhūti）の名が「印捺囉部帝」という形で本經に登場することが指摘されるに留まっている（TOMABECHI 2006: 91, n. 83; 田中 2010: 282）。

『寶王經』は「如是我聞」で始まり釈迦牟尼がアーナンダに教法を付嘱するという一般的な經典の枠組みを取るが、実際の説法は金剛手菩薩に委ねられるかた

(114) 法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流（苦米地）

ちで行なわれる。内容的には、過去仏・日清浄光明如来の世界で金剛手が精進授（*Vīryadatta?）王に説法する前半部（巻上）と、現在仏・釈迦牟尼の世界で金剛手がインドラブーティ王に説く後半部（巻下）に分けられるが、前半部・後半部ともほぼ同一のプロットで構成されており、固有名詞が入れ替わる以外その内容に大きな違いはない。『寶王經』のおおまかなプロットを、大正蔵の頁・行数と共に示すと以下のとおりとなる。

前半部 (1) 542c7- 世尊はヴァイシャーリーのアームラパーリーの園林に比丘・菩薩衆と住す (2) 542c27- 世尊が光明を放つ～アーナンダがその因縁を問う～世尊は無量の衆生が無生法忍を獲得していることを説く (3) 543a10- インドラブーティ王が世尊を詣で、無生法忍を得るための教えを乞う～世尊は、四種の法（声聞乗・縁覚乗・方广大乗・最上金剛大乘）のあることを示す (4) 543b5- 世尊は過去仏・日清浄光明如来の世界と寿量を説く（以下、過去世の因縁譚） (5) 543b13- 精進授王が日清浄光明如来を詣で、最上金剛大乘の教えを乞う (6) 543b24- 日清浄光明如来が金剛手菩薩に説法を命ずる～金剛手は精進授王と共に王の宮殿へ赴く (7) 543c14- 金剛手が王に灌頂を受ける～金剛手は大衆に説法、インド各地の諸王が金剛大乘に入る～百千の比丘が金剛大乘を請問～民衆が随喜・菩提心を発す (8) 544a5- 諸王・妃らが無生法忍を得る～金剛手は6年にわたり法を説く (9) 544b8- 金剛手は諸王らを摩呬捺囉（*Mahidhara）山に招く～日清浄光明如来が涅槃するとの報を受け、灌頂を受けるため一同、如来の許に赴く (10) 544b19- 金剛手は教化活動を如来に報告し、灌頂を乞う～日清浄光明如来が光明を発し、これを諸如来が讃える～金剛手ら一同は灌頂を得て摩呬捺囉山に帰還 (11) 544c8- 日清浄光明如来の涅槃後、金剛大乘の衆徒が摩呬捺囉山に金剛手を訪ねる～金剛手は、如来涅槃の後は金剛阿闍梨を師とすべきことを説き、姿を隠す

後半部 (1) 545b6- 世尊はインドラブーティ王が過去世において精進授王であったことを明かす (2) 545b11- インドラブーティは世尊に教えを乞う (3) 545b15- 世尊が金剛手に説法を命ずる～金剛手はインドラブーティと共に曼説羅補攪（*Maṅgalapura）城へ赴く (4) 545c8- 金剛手が説法する～民衆・インド各地の諸王が聴聞に訪れ、金剛大乘に入ること願う～金剛手は6年にわたり説法する (5) 545c25- インドラブーティは三昧・等至を得る～諸王・妃らも無生法忍を得る (6) 546a28- 金剛手は諸王に八種の成就法を説く (7) 546b6- 金剛手は一同を乞乞那（?）山へ招く～釈迦牟尼涅槃の報を受け、灌頂を得るため、一同クシナガラへ赴く (8) 546b28- 釈迦牟尼が光明を発し、諸如来がこれを讃える～一同、釈迦牟尼より灌頂を受ける (9) 546c9- アーナンダが釈迦牟尼より教法を付嘱される～釈迦牟尼が涅槃に入る～一同、金剛手と共に乞乞那山へ帰還 (10) 546c20- 金剛手が、仏入滅後は金剛阿闍梨を師とすべきことを説く (11) 546c28- 阿闍梨に師事する方軌 (12) 547a8- 各種の教説 (13) 547b13- インドラブーティらは金剛阿闍梨の教えを守ることを誓う (14) 547b20- 会中の諸菩薩・聴衆が歓喜し、経を信受～金剛手は姿を隠す

このように『寶王經』は、前半・後半がほぼパラレルとなる基本構成をもつが、後半の最後の部分 (11) (12) には、前半部には見られない具体的な教説が現れる。

法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流（苦米地）（115）

また、經の構成としては、後半部（9）のアーナンダに対する法の付嘱あるいは前半部（11）とパラレル関係にある（10）を以て完結するのが自然であり、当該の教説部分はのちの付加である可能性がある。本稿次節で検討する聖者流説の断片はこの増広と思われる箇所（12）に含まれるが、それに先立つ後半部（10）からのものとみられる引用が聖者流所属の『灯作明』に次のような形で現れ、本經が聖者流において重視されていたことがここでも示唆される。

『寶王經』546c21–24: 即復告言汝等學衆諦聽。汝已各各於此金剛大乘悉得證悟皆是得金剛大乘法者。汝等當知佛涅槃後。金剛阿闍梨。是汝等師。

『灯作明』216, 21–24: *tathāha Mahāmahāyānaratnarājasūtre — bhagavān Vajrapāṇih Oḍḍiyāna-parvate niṣaṇṇaḥ sarvāṃś ca vajrayānaśikṣitān āmantrayām āsa | śṛṇuta nikhilavajrayānaśikṣitāh tathāgataṃ parinirvṛtaṃ na paśyata śāstāraṃ | api tu vajrācāryo vajraguruḥ | so 'yaṃ śāstā bhavati ||* (TOMABECHI 2006: 91, n.83 参照。なお、この引用については、WAYMAN 1977: 68–69 にも言及がある)

なお、本經は本来『秘密集会タントラ』系ではなく『真実摂經（初会金剛頂經）』系に属する（cf. 543c20–21「乃至如來部金剛部寶部蓮華部羯磨部」；546a12–13「乃於眞實攝教中。證得相應三摩地得無生忍盡涅槃界」）ものとみられるが、このことも、当該の聖者流関連部分が増広である可能性を間接的に支持するであろう。

『最上大乘金剛大教寶王經』に見られる聖者流説

では、『寶王經』に出る聖者流説について見てみよう。本經においてまず最初に確認できるのは、聖者流独特の聖典解釈基準に関する次のような言及である（聖者流の聖典解釈基準全般については、松長 1998: 279–288 参照）。

『寶王經』547b9–12: 大王乃至遍六俱胝文字之義。亦無二無分別。一切如來皆如是説。彼智金剛教汝已悉聞。是等皆名眞諦。

ここに見られる「六俱胝」は、聖者流において聖典の文言を分類する基準とされる「六辺 (ṣaṭkoṭi)」に対応する。さらに、これに関連して言及される「智金剛教」とは、聖者流所属の釈タントラのひとつである *Vajrajñānasamuccaya*（北京版 No. 84）を指すものとみられ、実際、同釈タントラ 292b6–7 には、「六辺」の解説が次のような形で現れる。

byams pas gsol pa | bcom ldan 'das rnal 'byor gyi rgyud du de bzin gśegs pa thams cad kyis mtha' drug gis bśad pa ji ltar lags | bcom ldan 'das kyi bka' stsal pa | dgoṅs pas bśad pa dan | dgoṅs pa ma yin pas bśad pa dan | draṅ ba'i don dan nes pa'i don dan | sgra ji bzin pa dan sgra ji bzin pa ma yin pa rnams so ||

(116) 法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流（苦米地）

『寶王經』にはさらに、「六辺」を含む聖典解釈基準の分類である「七飾（saptavidhālankāra）」への部分的言及も確認できる。

『寶王經』548a14-19: 所有三瑜伽五烏補捺伽多。或六俱胝文字義。或說法成就義。或決定義。或說本行尼陀那方便因等。如是所說或四種或五種。或七種或十二種。種種不定皆不離二諦。

ここでは、「七飾」の第一項目である「序（upodghāta）」、前述の「六辺」、そして「七飾」の第二「方法（nyāya）」の内容が言及されており、一部訳語の対応が不明確ではあるが、聖者流所属の註釈文献『灯作明』の以下のパッセージとの関連が認められる。

『灯作明』2, 5-8: pañcasamkhyā upodghāto nyāyaś cāpi caturvidhaḥ | śaṭkoṭikaṃ tu vyākhyānam ākhyānam tu caturvidham || pañcamo dviprabhedaś ca ṣaṣṭhaḥ pañcaprabhedavān | saptamo dviprabhedaḥ syād alaṅkāraḥ samāsataḥ ||

『灯作明』2, 19-24: abhikrānta upodghāto dvitīyaḥ kathyate punaḥ | santānaś ca nidānaṃ ca niruktihetur ity api || janmotpattir manuṣyeṣu santāna ity kathyate | antaḥpurasya madhyāc ca niṣkramas tu nidānakam || samvaro vinayoddiṣṭo niruktir iti gadyate | phalākāṅkṣi cared dharmam sa hetur iti kathyate ||

『寶王經』において、聖者流説との対応がもっとも顕著なのは、「七飾」の第六「五種の人（pañca pudgalāḥ）」に關説する箇所である。これは説法の対象者を機根に依じて五分類するものであり、『寶王經』ではまず、

『寶王經』547b23-26: 菩薩告言有四種弟子。有五補特伽羅。王言四種弟子當云何說我今樂聞。菩薩告言。第一佛乘第二初乘。第三初學菩薩行第四諸菩薩摩訶薩行。此名弟子四種之相。

の形で言及されるが、これは『灯作明』の以下の言明に呼応する。

『灯作明』4, 9-10: loke niyatisambhūtāḥ sarvadā śravaṇārthinaḥ | anekākārabuddhitvāt pudgalāḥ pañca sammatāḥ ||

なお、「五種の人」との直接的な関連はないが、上引の經文中「第一佛乘第二初乘。第三初學菩薩行」の箇所についても、聖者流の基本論典『行合集灯』に以下のような類似の文言を見いだせることは付記に値しよう。

『行合集灯』345, 9-13: prathamam tāvad buddhayānāśaye śikṣate | yadā buddhayānāśaye śikṣito bhavati tadā navayāna ekasmṛtisamādhau śikṣate | yadā navayāne śikṣitas tadā kalpitayoge śikṣate | yadādikarmikasamādhau pratiṣṭhito bhavati tadā śatakulabhede 'vatarati ...

これに引き続いて『寶王經』は「五種の人」を具体的に列挙する。

法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流（苦米地）（117）

『寶王經』547c4-8: 王言云何菩薩五種補特伽羅。菩薩言所謂囉怛曩補特伽羅。贊捺囉補特伽羅。鉢訥摩補特伽羅。奔拏哩迦補特伽羅。烏怛鉢擲補特伽羅。是等於聞信戒施悉能具行爲烏波薩迦。

ここに出る「囉怛曩 (ratna)」「贊捺囉 (candana)」「鉢訥摩 (padma)」「奔拏哩迦 (puṇḍarika)」「烏怛鉢擲 (utpala)」の呼称は、『灯作明』の以下のパッセージに確認される。

『灯作明』4, 10-11: ratnacandanapadmās ca puṇḍarikas tathotpalaḥ | prakṛtyā bhinnasamjñās te sarvajñena ca bhāṣitāḥ ||

次いで『寶王經』は、「五種の人」各々について以下のように詳説する。

『寶王經』547c9-23: 於一切法雖得聽聞。而於少時皆悉忘失。此名烏怛鉢擲補特伽羅。若於祕密之法雖有所聞。不能爲他分別演說。譬如軍尼內藏明珠而不顯現。此名奔拏哩迦補特伽羅。或得信心大悲心聞法開解。如竹無節受持通達。此名鉢訥摩補特伽羅。凡聞法義咸存我見。譬如擊鼓空有其聲。以有我見不能利他。此名贊捺囉補特伽羅。是四烏波薩迦。而能一向專心求一切法。信心受持住金剛乘。復次心性猛利多聞持戒。一切能捨了知真實。凡所說法能隨根機。是名囉怛曩補特伽羅。此一烏波薩迦。常能爲諸弟子說種種法。時金剛阿闍梨如是選擇弟子。若得清淨殊勝如法弟子。乃可傳付祕密大乘一切勝義。當令修習不斷聖種。

この説明は、『灯作明』の以下の記述に見られるものと、用いられる比喻などの細部まで極めてよく一致する。

『灯作明』4, 13-22: aśrutvā vastu nikhilam dhāraṇāyām vicakṣaṇaḥ | kṣaṇād vismaraṇam yāti prakhyātotpalapudgalaḥ || grāhyam śrutvādhikam bhūri na śaknoti prakāśitum | kuṇḍikarpāsavad bhūyah puṇḍarikapudgalaḥ || śraddhāvān janakāruṇyo vikāsaḥṛdayaśruteḥ | niṣparvaveṇuvac chrāvī padmavikhyātapudgalaḥ || alpaśrutir ahaṅkāri nirmūlam bahubhāṣite | na śakyo 'nugrahaṁ kartum candanākhyātapudgalaḥ || suśīlo viśado dakṣaḥ prajñāvān ekasandhikaḥ | śrutvā prakāśayet samyak prakhyāto ratnapudgalaḥ ||

以上が『寶王經』にみられる「五種の人」に関する記述であるが、ここで注意したいのは、『寶王經』において「五種の人」が列挙される順序である。『灯作明』の対応箇所は偈文で書かれており、そこでの列挙の順序は韻律の制約によるものであって、機根の優劣など内容上の要請によるものではないと考えられる。しかるに一方、元来散文で著されたと考えられる『寶王經』においても『灯作明』と同一の順序で「五種の人」が列挙される。さらに、このような順序の一致は「五種の人」を詳説する箇所においても見られる。このことは、両テキストにおける「五種の人」に関する記述内容が極めてよく一致することと併せて考えた場合、『寶王經』の増広とみられる部分が『灯作明』の存在を前提としていることを予想させる。逆に言えば、すでに聖者流で重視されていた『寶王經』に『灯作明』の所

(118) 法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流（苦米地）

説を組みこみ、これによって聖者流説を仏説として権威づける意図があったものと推測されるのである。

なお、『寶王經』には上記の他にも、聖者流のマンドラ儀礼や瞑想体系との関連を示唆する断片的な記述（547c24-548a4, 548a4-7, 548b8-10 など）が存在するが、ここではそれらについての詳細は割愛する。

まとめ

以上、『寶王經』の構成と、そこに見られる聖者流説について概観した。紙数の制約もあり、細部にわたる考察はできなかったが、本經がインド後期密教の特定流派に関係する数少ない漢訳仏典のひとつであることは十分に示し得たと考える。『秘密集会タントラ』の流派形成過程において、特定流派が自己の権威づけるために、仏説の地位をもつ釈タントラ類を自説に沿う形で「捏造」してきたことは、松長有慶博士らの研究によって明らかにされてきたが、『寶王經』もまたそのような動きの一端を示すものとして注目に値すると言える。他の後期密教系の漢訳仏典と同様、『寶王經』も中国・東アジアの仏教にはほとんど影響を及ぼさなかったものと考えられるが、インド密教の展開を考える上で本經は、極めて興味深い情報を含む貴重な資料と位置づけられるであろう。

〈参考文献〉

『灯作明』=Candrakīrti, *Pradīpoddyotana*: Skt. ed., Chintaharan Chakravarti, *Guhyasamājatantra-Pradīpoddyotanaṭīkā Śaṭkoṭivyaṅkyā*, Tibetan Sanskrit Works Series 25, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1984; 『行合集灯』=Āryadeva, *Caryāmēlāpakapradīpa*: Skt. ed., Christian K. Wedemeyer, *Āryadeva's Lamp that Integrates Practices. Caryāmēlāpakapradīpa*, New York: The American Institute of Buddhist Studies, 2007, pp. 337-495; 田中 1991 = 田中公明「『秘密集会』曼荼羅の歴史的展開」, 『密教図像』9, pp. 1-14 (横組); 田中 2010 = 田中公明『インドにおける曼荼羅の成立と発展』, 春秋社; 松長 1998 = 松長有慶『密教経典成立史論 (松長有慶著作集 1)』, 法蔵館; TOMABECHI 2006 = Toru Tomabechi, *Étude du Pañcakrama. Introduction et traduction annotée*, Thèse de doctorat, Faculté des Lettres, Université de Lausanne; WAYMAN 1977 = Alex Wayman, *Yoga of the Guhyasamājatantra*, Delhi: Motilal Banarsidass.

〈キーワード〉 インド後期密教, 『最上大乘金剛大教寶王經』, 『秘密集会タントラ』, 聖者流

(一般財団法人人文情報学研究所主席研究員, 文博)